

## イベント報告

ステークホルダー・ダイアログ「ESD for 2030 に向けたシナジー  
Learn for our Planet, Act for Sustainability」

### ESD for 2030：国際・国・地域レベルでの実践を議論

2021年7月1日、UNU-IASは環境省とともに、地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）のアウトリーチ活動の一環として、また、国連ハイレベル政治フォーラムの事前イベントとして、ステークホルダー・ダイアログ「ESD for 2030 に向けたシナジー：Learn for our Planet, Act for Sustainability」を開催し、ユネスコESD世界会議の成果やESD for 2030の議論に関する最新動向を共有し、分野間の相乗効果（シナジー）を創出するための方策について議論を行いました。

さらに、ウェビナーでは、地域の実践者や研究者をつなぎ、科学的知見に基づいた政策決定に貢献するRCEsとESDプロジェクトの重要な役割が強調されました。本シンポジウムには、約100名が参加しました。

冒頭の開会挨拶では、山口しのぶUNU-IAS所長が、コロナ禍で複雑化した様々な課題の解決および持続可能な開発に向けた社会変革に向けたESDの重要性について強調した他、ESDに関するユネスコ世界会議において、UNU-IASが持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点（RCE）事業の気候変動対策を紹介するブースやライブセッションや、地域や高等教育におけるESDに関するセッションに貢献したことを紹介しました。

続いて登壇した永島徹也環境省大臣官房総務課長は、日本政府が2021年6月に公表した地域脱炭素ロードマップについて触れ、地域が主体となり環境・経済・社会の三側面が調和した社会を実現してゆくために、ESDの重要性が以前にも増して高まっていると述べました。

国際動向では、UNESCO ESD セクション・チーフのアレクサンダー・ライヒト氏は「ESD for 2030」枠組み<sup>1</sup>と、2021年5月17～19日に開催された「持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議」の成果を共有しました。ライヒト氏は、SDGsの17の目標を進展させるための重要な手段として、本枠組みの重要性を強調しました。また、多様なステークホルダーをまとめ、相互効果を発揮させる国レベルでのコミットメントとイニシアチブの重要性について言及しました。

ジョンウィー・パクUNU-IASプログラム・オフィサーがモデレーターを務めたQ&AセッションではSDGsの目標4.7の進展に向けて、データに基づく研究のための協力の必要性を強調しました。さらに、5つの優先分野の相乗効果の重要性、特に若者を政策に参加させるための代表やネットワークの設立についても言及しました。

国内動向では、まず、堀尾多香文部科学省国際統括官付国際統括官補佐より、日本政府のESDに関するユネスコ世界会議への貢献に関する報告があり、第2期ESD国内実施計画<sup>2</sup>や教員向けの「ESD推進のための手引き」（改訂版<sup>3</sup>）等が紹介されました。また、海洋プラスチックや、高齢化、防災など各地域の課題に取り組むユネスコスクールの事例紹介<sup>4</sup>や、ESDに携わる教職員の意識が負担感から学校の改善に向けた手ごたえに変容したという報告がありました。

<sup>1</sup> <https://undocs.org/A/C.2/74/L.48/Rev.1>

<sup>2</sup> [https://www.mext.go.jp/unesco/001/2018/1407955\\_00010.htm](https://www.mext.go.jp/unesco/001/2018/1407955_00010.htm)

<sup>3</sup> [https://www.mext.go.jp/unesco/004/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/1405507\\_01\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/unesco/004/_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/1405507_01_2.pdf)

<sup>4</sup> <https://www.unesco-school.mext.go.jp/network/>

次に、三木清香前環境省大臣官房総合政策課民間活動支援室室長より、ESD 国内実施計画の他に、SDGs 実施指針、地域脱炭素ロードマップ<sup>5</sup>等の政策にも ESD の活用が明記されているとの説明がありました。また、具体的な取組として環境教育・学習推進リーダー育成研修、全国および各地域の ESD 推進ネットワークの整備、国連大学 RCE 活動への協力等が紹介されました。

続いて、RCE 横浜若者連盟の廣木亮哉氏が大学生有志による横浜 LOVE（地域愛）を軸にした実践として、地域の魅力を発見するまち歩きや SDGs 実践者へのインタビュー、行政や企業と連携した事業について紹介しました。

GEOC 星野智子がモデレーターを務めたパネルディスカッションでは、野口扶美子 UNU-IAS リサーチフェローも加わり、ユネスコ ESD 世界会議の意義、地域における ESD の推進のポイント、ユースによる ESD の推進、そして ESD 推進における研究の役割等について参加者との質疑応答も交えながら議論が行われました。

ライヒト氏は、ユネスコ ESD 世界会議の意義について、グローバルレベル・国レベル双方の政治的コミットメントが確認されたことであると話しました。また、三木氏は地域における ESD の推進について、ネットワークの形成や世界全体の気候問題に取り組む中で、地域の問題も解決するグローバルな視点を一層推進することが重要であると話しました。廣木氏は、ユースの ESD の推進について、ユースにしか見えない目線をしっかり提示することが重要だと話しました。

野口は、研究が ESD の推進において果たす役割について、近代・科学知的な視点からは見落とされがちな地域の価値や課題を、地域の人々とともに見つけ、データとして積み上げ、研究者や政策決定者にわかる言語で効果的に伝え、政策に反映させること、また、政策や研究として議論されている持続可能性課題を地域の中で意味づけ、実践に役立てていくことが重要であると話し、UNU-IAS が主導する RCE の活動を通じてこうした事例が生まれていると述べました。

最後に、竹本明生 UNU-IAS プログラムヘッドより、ESD for 2030 は社会変革に向けて多様な主体の連携・協働が重要であることを強調し、ウェビナーを締め括りました。

当日のウェビナーの録画は GEOC YouTube チャンネルからご覧いただけます。

(<https://www.youtube.com/user/GEOCsince1996/videos>)

また、発表資料は以下の UNU-IAS ウェブサイトからご確認いただけます。

(<https://ias.unu.edu/jp/news/news/esd-for-2030-global-national-and-community-actions-were-discussed-2.html#info>)

---

<sup>5</sup> [http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/datsutanso/pdf/20210609\\_chiiki\\_roadmap.pdf](http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/datsutanso/pdf/20210609_chiiki_roadmap.pdf)